

エンディングノート作成支援システムの構築

竹島 未紗[†] 喜多 千草[†] 加藤 隆[†] 吉野 孝[‡] 山本 里美[‡]

関西大学[†] 和歌山大学[‡]

1. 研究背景

人生の最期を自分の望むように自分で準備する、「終活」という言葉が存在する。週刊朝日で2009年に連載された『現代終活事情』から生み出された言葉で、関連書籍が多く出版されたことで知名度が上がり、2010年に新語・流行語大賞にノミネート、さらに2012年にはトップテンに選出されることとなった。その終活の一環として、自分の死に関する希望を書き留めておくためのエンディングノートが存在する。遺言書とは異なり、法的効力を有していないことが特徴で、家族の負担を軽減することを目的としている。

しかし、2014年2月6日から12日に行われたライフメディアリサーチバンクの調査によると、60歳以上の全国男女3494人のうち、エンディングノートを知っている、聞いたことがあると回答した人が84.6%であるのに対し、エンディングノートを書いていると回答した人は6.0%、書いてみたいと思っている人が42.5%であった^[1]。書いている人と、書いてみたいと思っている人の割合の差がこれほどまでに広がっている原因として、自分の死を見つめることの取り組みにくさや、エンディングノートの多様化による選びにくさが挙げられる。そこで、自分にあったエンディングノートを検索できるサイトを制作することにより、書く人を増やすことができるのではないかと考えた。

2. 本研究のアプローチ

本研究では、書籍として販売されているエンディングノートと、インターネット上に無料で公開されているエンディングノートをサンプルとしている。川喜田二郎のKJ法を用い、エンディングノートを構成する要素を洗い出した後、オープンカードソートを実施し、ユーザにとってわかりやすい分類体系を検証する^[2]。KJ法とオープンカードソートの結果を踏まえ、カテゴリ名を設定し、必要な項目をチェックボックスで選択するだけで、自

分に合ったエンディングノートが検索できるシステムを作成する。

また、エンディングノートは主に高齢者が利用するものであるため、サイトの利用者にも高齢者が多くなることが予想される。そのため、Webページの使い勝手を意味するWebユーザビリティに配慮する必要がある。これに関しては、文字のサイズ変更を可能することで対応する。

3. 実験内容

KJ法を用いて、エンディングノートの構成要素を洗い出す過程で、医療や介護に関する項目は分類し難いことがわかった。延命治療と終末期医療は意味の異なるものであるが、治療内容に重なりが見られ、終末期医療における最期の過ごし方と介護における最期の過ごし方は、意味は同じであるが、時期に異なりが見られる。そこで、これらの項目について、オープンカードソートを実施し、ユーザ視点の分類体系を構築、検証することにした。

事前準備として、KJ法を用いて洗い出した医療や介護に関する項目を、50枚のカードに書き出した。被験者には、関連の深いカードをカテゴリ化し、カテゴリ名をつけるように指示をする。あるカードが、複数のカテゴリに所属すると被験者が判断した場合には、最もふさわしいカテゴリに所属させ、その他のカテゴリには、被験者の手書きで項目名が記入された予備カードを所属させることで対応する。また、カテゴリ内が複雑になった場合、サブカテゴリカードを利用し、サブカテゴリを新たに作成しても良いこととした^[3]。この実験を、介護経験のある40～60代の女性4名に実施し、実験結果をまとめた。

4. 実験結果

オープンカードソートを実施した結果、4名の被験者の平均所要時間は25分38秒、平均メインカテゴリ数は5.5だった。サブカテゴリカード、補助カードを利用した被験者はともに2名で、利用者に対する平均サブカテゴリ数は4.7、平均補助カード使用数は3.5だった。

どのような点に着目してカードを分類しているのかを調べるため、実験中は考えている内容を

Implementation of a System for Supporting Advance Care Planning

[†]Kansai University

[‡]Wakayama University

声に出すように指示したところ,全員が,治療の流れに沿って分類していることがわかった。さらに,4名中3名の被験者は,カテゴリの順序については指示していないにもかかわらず,治療の流れに沿って,カテゴリを並び替える場面もあった。

延命治療と終末期医療の区別について,実験後に質問したところ,介護ヘルパー資格を有している女性は「生きるための治療なのか,死ぬ前の緩和治療なのかで判断した」と回答し,看護師の女性は「医療的治療と,医療的治療を終了した後のケアに分けて考えた」と回答した。このことから,延命治療と終末期医療は,治療内容は重なるものの,カテゴリは区別すべきだとわかった。

また,終末期医療における最期の過ごし方と介護における最期の過ごし方の区別について,4名中3名の被験者が,「余命わずかなときの希望」や「余命の過ごし方」などのカテゴリ名で,医療カテゴリに分類した。実験中の思考発話や実験結果からは,被験者全員が,医療と介護を区別してカテゴリを設定していることが分かっている。このことから,医療と介護はカテゴリを区別し,最後の過ごし方については,医療カテゴリ内に分類すべきだとわかった。

5. 実装

- ① カテゴリ数は,オープンカードソートの平均カテゴリ数に極力近づける。
- ② 医療と介護は,カテゴリを区別する。また最期の過ごし方については,医療カテゴリに分類する。
- ③ 延命治療と終末期医療は,それぞれカテゴリを設定し,区別する。
- ④ 治療の流れを意識して,カテゴリの順序を決める。

オープンカードソートの結果をもとに,上記の条件を設定した。この条件と KJ 法の結果を踏まえて,最終的なカテゴリ設定を完成させた(図1)。

【医療】	【介護】
1. 健康状態について	1. 介護について
2. 難病告知について	2. 後見制度について
3. 自分に関わる人の希望	
4. 延命治療について	
5. 終末期について	
① 終末期医療の希望	
② 最期の過ごし方	
6. 死後の希望	
① 臓器提供・献体	
② 遺体への処置	

図1. 最終的なカテゴリ設定

これらの医療や介護に関するカテゴリ分けを

もとに,ファセット検索ツールを作成する。ファセット検索とは,カテゴリ(ファセット)の組み合わせによって,目的の情報を絞り込む手法である。今回は,エンディングノートの構成要素を整理し,カテゴリとすることによって,目的のエンディングノートを検索できるようにした(図2)。



図2. 「難病告知について」と「後見制度について」を選択した際の検索結果画面

6. 今後の展望

今回のオープンカードソートは,介護経験のある人を対象に実施したものである。今後は,高齢者に接するボランティア活動を行っている60代の人々など数グループに実験を行い,結果を比較することで,よりよい分類体系の構築を目指していく。

また,現在のシステムでは,高齢者に分かりやすいものとは言えない。今後,エンディングノート検索サイトを少しでも多くの人に利用してもらうため,高齢者にも分かりやすく,使いやすいシステムに改良していく。

注

[1] ライフメディア リサーチバンク - 終活・エンディングノートに関する調査。40%が終活は必要と思っている。(2015.01.07 存在確認)

http://research.lifemedia.jp/2014/02/140219_endingnote.html

[2] 川喜田二郎『発想法 - 創造性開発のために』中央公論社,1967

[3] 堀雅洋・大西奈緒・喜多千草,「多言語公務文書共有のためのポータルサイト構築:カードソートを用いた分類体系の設計と評価」,『情報処理学会論文誌』,Vol.51,No.2,pp.590-603,2010